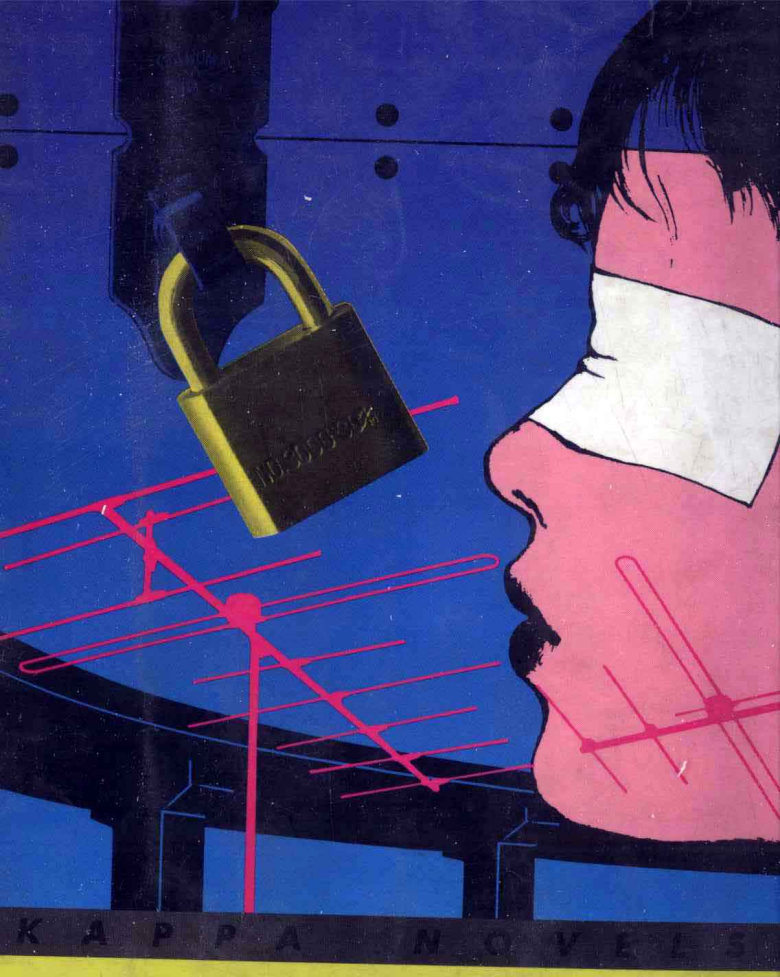


長編推理小説　書下ろし

複合誘拐

大谷羊太郎

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　**複合誘拐**　¥650

昭和55年3月30日　初版1刷発行

著者　大谷羊太郎（おおたに ようた ろう）
埼玉県浦和市広ヶ谷戸 209-97

発行者　小保方宇三郎

印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Yōtarō Ōtani 1980
(分)0-2-93(製)02395(出)2271(0)
Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

複合誘拐

大谷羊太郎

カッパ・ノベルス

目次

第一章　脅迫電話　5
第二章　拉致のテクニック　29
第三章　緊急配備　50
第四章　人質消失　70
第五章　特殊犯班　92
第六章　橋上の身代金　108
第七章　秘密通信　132
第八章　スケッチ画の罠　152
第九章　闇の中の潜入者　173
第十章　最後の金策　193
第十一章　廃屋の黒煙　207
第十二章　容疑者一巡　226
第十三章　真犯人　248
解説　山村　正夫　274

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

本文のイラストレーション・金森（かなもり）　達（とおる）

第一章　脅迫電話

1

三月七日午後一時四十五分
東都テレビ局、第三出演者控室。
いまそこは、女の花園といった雰囲気であった。
壁ぎわにずらりと並んだ化粧台の前を、十名のうら若い美女が占めていた。彼女たちの出演する生放送番組は、間もなくはじまる。誰もが押し黙ったまま、最後の化粧点検に余念がない。
ほかに、数人の美容師や出演者付添人の姿も見える。みな、女性であった。甘ずっぱい高級香水の匂いが、空間を満たし、カラフルなドレスの色は、殺風景な室内を華やかに彩る。
ふくらんだ熱気は、春めいてきた気候のせいばかりではなかった。出演者たちは、テレビスタジオには不慣れな素人ばかりだ。本番直前とあって、明らかに必要以上の緊張を見せている。
そのうえ、出演する番組が、いわば美女コンテストなのであった。放送中にこの十人の中からベストワンが選ばれる。誰もが無言でいるのは、強烈なライバル意識のあらわれなのかもしれない。
窓のないこの部屋は、新館の一階にあった。隅に見えるドアの横手から一方の壁に沿って、化粧台が設えてある。奥行きのない長方形の空間なので、これだけの人数が入ると、ゆとりのスペースはほとんど失われた。
軽いノックの音がして、ドアが開いた。顔をのぞかせたのは、ＡＤ（アシスタント・デレクター）の北条であった。年齢は二十代のなかばだろう。
「みなさん」
ジーンズ姿の彼は、大声で呼びかけた。室内の女性たちは、いっせいに彼のほうを見る。
「ただいま、午後一時四十五分。放送開始まで、あと十五分です。五分前になりましたら、スタジオのほうにご

案内します。トイレに行く人は、いまのうちに」
声に応じて、鏡の前のスツールから、二人が立ちあがった。その動きに釣られたように、続いて三、四人が席を離れかけた。
「重ねて注意しておきますが」
すかさず、北条はつけ加えた。「部屋を出た人は、まっすぐこちらに戻ってきてください。局内をうろうろしたりして、本番に遅れたりしたら、大減点になりますよ。この付近の通路は、少し離れると、狭いうえに見とおしが悪くて、迷いやすいですからね。とにかく何度も言うように、スタジオ入りまでは、ここから出ないでくださいよ」
美しい出演者たちは、固い表情で彼の言葉にうなずいた。
畑山武は、第三控室前の通路にたたずんでいた。二メートルほどの通路を挟み、控室と向き合って第三スタジオの入口がある。ぶ厚い防音扉はいっぱいに開けられていて、スタジオからこぼれ出したように、人が固まっていた。
賑やかに、談笑している。出演者の付添いグループだ。中年の婦人が多い。母親たちだろう。
畑山も、付き添いの一人であった。しかし彼は、生来、寡黙な性質だし、本番を前にして他人と冗談を言い合う心境でもなかった。
〈無事に、お嬢さんが出演を済ませてくれればいい〉
それだけが、まず念頭にあった。入選するかどうかの問題は、二の次であった。
畑山は、四十三歳になる。職業は、社長のお抱え運転手だ。今日は及川雄一郎社長の特命を受けて、彼の一人娘、及川理絵の付添役をつとめている。
土、日を除く毎日、東都テレビでは午後二時から、主婦向けのニュースショー番組を放映している。司会アナウンサーの名をかぶせて、「愛田良平アワー」という。
視聴率をあげるため、局側では新企画を打ち出した。アシスタント役の女性司会者を一般から公募して、番組の話題性を盛りあげることにしたのだ。入選者には、ヨーロッパ旅行と二百万円の支度金をつけた。
女性週刊誌や芸能誌とタイアップして、番組の宣伝効果を高めた。作戦は成功した。審査の光景が繰り広げら

れる毎週水曜日の視聴率は、以前よりはねあがった。視聴者にもハガキ投票による審査参加を呼びかけたので、いっそう関心が深まったのだろう。投票者には宝石や時計などの賞品をつけ、さらに人気をあおり立てた。

そうした経過を経て、おびただしい数の応募者の中から、ようやく最終候補の十名が残り、今日の放送日を迎えることになったのだった。

二十一歳の女子大生、及川理絵は、順調に予選段階をくぐり抜けて、本選に臨むことになった。本人はむろんだが、父親の雄一郎がすっかり興奮してしまった。そして今日の出演に万に一つの手落ちもないよう、社用車運転要員の畑山に、娘の付き添いを命じたのだ。

〈口うるさい社長だからな。おれが、たとえ些細なミスを犯しても、雷を落とすだろう〉

付添役だからといって、車での送り迎えのほか、これという仕事があるわけではなかった。しかし短気な社長の性格を思うと、のんびり構えてはいられない。

理絵が見事に入選したら、及川は手放しで喜ぶだろう。だが落選となると、期待が大きいだけに、ショックも強まる。その鬱憤を、畑山に向けてくる可能性もある。

入選の確率は、十対一であり、それを考えると、畑山の気は重くなる。

控室は、女性ばかりの部屋となり、畑山は入室を遠慮した。理絵に呼ばれたら、すぐ応じられるよう、ドア近くの目につきやすい位置で、彼は神経を張りつめていた。

控室のドアが開き、着飾った出演者たちが、通路に出てきた。向き合ったスタジオには入らずに、畑山の立っている方向にやってくる。その数は六名。五人目に現われたのが、理絵であった。

誰もが、一様に固い表情をしていた。縦列を作るような形で、壁に背をつけた畑山の前を過ぎてゆく。

制服風の紺のスーツをつけた畑山の視線は、理絵の動きを追っていた。彼女は、明るいブルーのスカートに、濃紺のジャケット、そして白のブラウスに赤いネクタイを締めている。女子大生らしい、清潔感があふれていた。手には、ハンドバッグを提げている。

ふっくらとした下ぶくれ気味の頬、背はさして高くないが、スタイルはいい。

声をかけられるのではないか、と畑山は理絵の顔を見つめ続けた。彼女は少なくとも目の端に、畑山の姿をと

らえたはずだ。しかし理絵は、笑顔ひとつ送ることなく、畑山のすぐ前を通り過ぎた。

理絵の横顔に、いまさらながら美しさを感じた。鼻すじの高さといい、白いなめらかな膚といい、日本人離れした美貌だ。

〈でも美しさと、やさしさは違うからな〉

理絵の後ろ姿を見送りながら、畑山は胸のうちでつぶやいた。彼女は父親に似て、勝ち気な性格の持ち主だ。引き締めた赤い唇からも、コンテストに向ける闘志のほどが読み取れる。

〈おれは、完全に無視された〉

屈辱めいた感情が、畑山の心を曇らせた。いかにも風采のあがらない中年男だが、彼女のために気を遣っているのだ。並みの娘なら、ほほえみぐらいは投げてくるだろう。

彼女たちは、急ぎ足で通路の曲がり角に消えたが、やがて一人ずつ戻ってきた。本番前、曲がり角の向こうにある手洗いに向かったのだと、最初から想像はついていた。

五人が引き返してきて、控室に入った。だが、理絵だけはそれっきりになった。

2

午後一時五十七分

田代裕二は、第三スタの入口に着いた。

田代は三十歳、「愛田良平アワー」で、事件もの特集コーナーのレポーターをしている。均整のとれた細身のからだを、紺色ストライプのスーツに包んでいた。えんじ色のアスコットタイに白っぽいスポーツシャツが、二枚目風の容貌に映えて見える。

番組が事件特集を放送するのは、毎週月曜日と決まっている。今日は非番なのだが、午後三時から次回放送分の打合わせ会があり、その席に出るため局に現われたのだ。

早い時間にやってきたのは、二時からの本番を見学する目的があったからだった。すでに放送開始直前であり、スタジオの大扉はピタリと閉ざされていた。

〈水曜日は、女性司会者の公募審査の日だ。とりわけ決選日とあって、スタジオの中には取材記者たちも詰めか

けているだろう〉

田代自身も、最後の一人が決まる瞬間をじかに見たくて、こうして一時間も早く局入りしたのだ。

関係者は扉の内側に吸い込まれたあとなので、付近はがらんとしていた。二人の男だけが、まだ扉の外にいた。一人は顔見知りのAD、北条であった。

「おはようございます」

と、田代は彼に愛想よく声をかけた。北条と向き合っている地味な中年男には、面識がなかった。

北条は、むっとした顔つきで、男と対していた。小ぶとりの男のほうは、ひどくオドオドとしていて、身を縮めている感じに見える。

「田代チャン、参ったよ」

北条は、仏頂づらで田代に答えた。

「何かあったんですか」

年齢は、田代のほうが三つ四つ上だが、局員には言葉遣いを崩せない。

「最終審査に出場する女の子が一人、本番前にいなくなった」

「ほう、そいつは困りましたね」

「さっきまでは、控室にいたんだ。本番前、ほかの出場者たちといっしょに、トイレに出た。それっきり、彼女だけが戻ってこない」

「出場するのがいやになって、逃げ出したんじゃないんですか」

タレントだって、失踪騒ぎを起こす例が、ときたまある。まして素人出演者だ。ふっと、いや気に誘われて帰ってしまったのかもしれない。

「いいえ、そんなはずはありません」

それまで押し黙っていた中年男が、むきになって田代に言った。「お嬢さんは、大変な意気込みで、今日の最終審査に臨まれたんです。指定された時刻よりも、一時間も早く局に入っていたくらいですから」

そばから北条が、渋い顔で口を添えた。

「消えたのは、及川理絵という女子大生。この人は付き添いの畑山さん。あちこち捜してもらったんだが、見当たらないんだよ」

「必死になって駆けずり回ったんですが、どこにも見えません。人に頼んで、女子トイレの中まで調べてもらいました。なにぶんにも、局内は広いうえに不案内なので、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

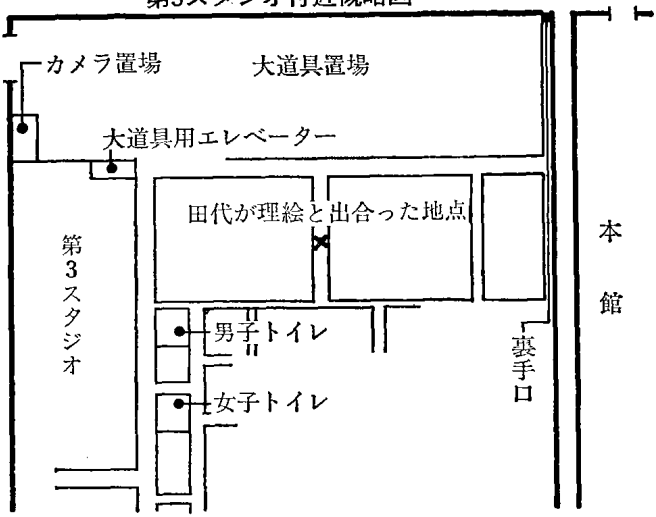
思うように動けません。しかしお嬢さんが、出演間近の大切な時間に、遠くまで足を伸ばすとは考えられないんです」
困惑と焦燥が、畑山の浅黒い顔をゆがませていた。
「悪いけど、田代チャン」
北条は、冷ややかな目で畑山を見やると、「この人と一緒に、彼女を捜してくれないか。本番に遅れて落選するのは本人の勝手だが、画面に穴をあけられると、出演者係のおれに文句が回ってくる」
戸口の上部に取りつけられた赤ランプに、明かりがついた。
「ほら、本番が始まってしまったぜ。おれは中に入らなくちゃ」
舌打ちをして、北条は扉を引いた。
「じゃ、頼んだよ。彼女の出番まで、あと十五分ほどある。それまでに必ず間に合わせてくれよ」
一息にまくし立てると、北条は扉のすき間からスタジオ内部に、身をすべり込ませた。
残された畑山は、すがるような目で、田代を見つめた。
「私はどうしたらいいのか。消えたのは、社長の一人娘なんです。いまごろ社長は、テレビの前に陣取って、お嬢さんの姿が映し出されるのを、ワクワクしながら待っているはずなのに」
「お嬢さんの不出場を知ったら、きっとびっくりするでしょうね」
「そりゃあ、もう。付き添いの役を果たせなかった私は、どんな叱責を受けることか。私は社長付きの運転手で、身分の保証がないんです。そのうえ、社長はひどく気短かな人ときている」
畑山のうろたえぶりは、見るも哀れであった。溜息を吐き、貧乏揺すりをやめない。
身分の保証がない点は、田代も同じといえた。やはり彼も、他人の顔色をうかがいながら、生活をつないでいるようなものであった。畑山の立場に、深い同情をおぼえた。
「畑山さん。ちょっとした手がかりがあるんです」
「えっ、手がかりですって」
「私はね、いまここにくる途中、お嬢さんらしい女性を、ちらっと見たんですよ。お話を聞いているうちに、はっきりと思い当たりました。ブルーのスカートに濃紺のジ

ャケット、赤いネクタイが印象に残ったな。どうです、その人ではありませんか」
「そうです。間違いありません。いったい、どこで」
畑山の瞳は輝いた。
「案内します。ついてきてください」
田代は、いまきた方向に、早足で取って返した。畑山も、それに続いた。

東都テレビ本社は、千代田区富士見町の高台の端に位置している。正面入口辺から北の方を臨めば、眼下には国電中央線が走る。飯田橋の駅も近い。新宿区、文京区の大部分は一望に収まる。
つい先刻、本館の玄関口を入った田代は、慣れた足どりでロビーを横切り、建物の奥に足を踏み込んだ。
局の構造は、八階建ての本館と、隣接した十二階建ての新館とが、メインになっている。新館内部の通路もややこしいが、本館のほうはまるで迷路のように入り組んでいた。改造や建て増しを重ねた末にそうなったのだ。二十七年前、東都テレビが開設したときには、五階建てのビルが一つとアンテナ塔が建っていただけであった。その後、テレビ企業は急激に膨張し、それに伴って、社屋は上に伸び、かつ敷地面積を拡げて、いま本館と呼ばれている形となった。
本館玄関を入って新館に行くのには、左方向に伸びる曲がりくねった連絡通路を抜けなければならない。壁の矢印に沿ってゆけば迷うことはないが、距離的には長いコースになる。
田代はいつも、別の道順を踏んだ。本館を奥に向かってまっすぐ抜け、非常口から建物の裏手にいったん出る。建物と裏塀との間隔は三メートルほど。昼間でも人の気配のない場所だ。そのスペースを塀に沿って左方向に十メートルほど進むと、本館に隣接して建つ新館の裏手非常口がある。第三スタジオに行くのには、建物の中をぐるぐる歩くより、このコースのほうがずっと簡単で早く着く。局に詳しい田代が、自身で発見した近道であった。
新館裏壁のその非常口は、建物の端ギリギリの位置にあった。前に立った田代の目から見ると、建物の左手の端に当たる。ドアを開けた。コンクリートの狭い通路が、まっすぐ奥に伸びる。通路の右手壁は、大道具置場とを仕切る壁になっている。

十五メートルほど直進して、右に折れた。さらに二十メートル進んで左折。このあたりの通路は、人がやっとすれ違えるほどの幅しかない。物音も死んでいる。
〈表側は派手で賑やかなテレビ局だが、ここはまるで深い山の中みたいだ〉
と田代がぼんやり思ったとき、不意に前方右手の曲がり角から、若い女性が現われた。急ぎ足のその女性は、田代から顔をそむけるようにして、田代のわきをすり抜けた。
〈おや、どこかで見た顔だが〉
そんな気がした。
いま、北条や畑山の話を聞いているうち、彼女が審査会の出場者だったのを思い出したのだ。テレビの画面を通じて、予選の光景を何度か見ている。出場者の一人、及川理絵の顔が、漠然とだが記憶に引っかかっていた。
しかし、そのときは気にもとめず、彼は第三スタジオに急いだ。もう一つ角を曲がると、もう三スタは近い。角の手前にトイレがある。偶然そこから、顔見知りのドラマタレントが出てきた。
「よう、田代チャン。しばらくだな」
気やすく呼びかけてきたのは、田代とは同年輩で、波木康行という悪役専門の男であった。田代にもドラマタレントの肩書がある。二人とも端役の域を出ないが、それだけに仲間意識を抱き合っている間柄だ。
「病気だと聞いたが、よくなったのか」
「全快とは言えないが、寝てばかりもいられない。仕事をしないと、あごが干上がってしまうからね」
「顔色がよくないな。でも、それでかえって凄味が出ている。きっと、いい役がもらえるぜ」
「いや、こうして売り込みに回ってるんだが、現実は厳しいな。役者が病気したらお手上げだと、今回はつくづく感じたよ」
体格がよく、悪相の持ち主だけに、田代に見せた弱気の表情が、ひとしお哀れっぽい。波木は酒の飲み過ぎで肝臓をこわした。その酒も、生活の不安をまぎらすためだったようだ。
「元気を出してくれよ。泣きごとをこぼす顔じゃないんだから」
慰めを言ってみたものの、明日はわが身かとも思うと、田代の気は重くなった。

第3スタジオ付近概略図



五分ほど、そこで立ち話をして別れた。それからスタジオに急いだ田代は、北条と畑山とが深刻な顔を向け合っている場に着いた、というわけであった。

3

午後二時二分

田代は、足をとめた。

「ここなんですよ。私が彼女とすれ違ったのは」

「で、お嬢さんは、それからどちらに行ったんでしょうかね」

畑山は、理絵の去った方向に、切羽詰まった目を光らせた。

「さあね。ごらんのように、この通路はあそこでT字型に突き当たる。右に行けば、建物の非常口に続き、局の裏庭に出られる。これは、私が入ってきたコースだ。左に行くと、大道具置場の入口がありますよ。たぶん、彼女は右折して建物の外に出たんじゃないですか」

「なぜ、そう考えるのですか」

真剣なまなざしを、畑山は向けてきた。

「きっとお嬢さん、気が変わって自宅にでもお帰りになったんですよ」
「とんでもない。今日の出演に、すべてを打ち込んでおられた。行動の意味は不明ですが、すぐ控室に戻るつもりだったのでしょう。それが、不測の事態で、戻れなくなったのでは」
「不測の事態というと？」
「たとえば、思わぬ事故でけがをして、動けなくなったとか」
「でも、事故があれば、局の中なら騒ぎが起こり、すぐ連絡がスタジオにもありますよ」
「いや、人のいない場所で、事故が発生することだってある」
「なるほど、人のいない場所で事故か」
田代は、畑山の口にしたヒントをつぶやいた。とたんに、閃きが走った。
「それなら、大道具置場かもしれない」
「行ってみましょう」
畑山にせき立てられて、田代は走り出した。突き当たりを左に折れると、十メートルほどで、右手の壁は切れる。ここが、大道具置場の入口なのである。新館一階は、裏側の奥の部分が、巨大なスペースを占める大道具置場となっていた。
二人は、その内部に走り込んだ。
天井の高い倉庫風の構造である。中央部分は通路に使うために開けてあり、その左右に各種のセットが置いてある。番組別に固めてあるせいもあって、大きさの不揃いな大道具が、雑然と押し込められている感じだ。
家屋の外壁、室内の壁板、歌謡番組に使われる抽象模様の釣りセット。郵便ポスト、公衆電話ボックス。バーのカウンター。並べられた本の背表紙を写真にとり、原寸大に引き伸ばした書棚のパネル。公園のベンチ、街燈、樹木……。
田代と畑山は、手わけしてセットの陰をのぞいて回った。この巨大な物置小屋の中には、ほかに人の姿もなく、あわただしく走り回る二人の足音だけが、コンクリートの床に響いた。
彼らの入った入口から見ると、大道具置場は横に長い長方形の形状をしている。正面の壁が、裏庭に接しているわけだ。左手の壁にも、出入口がある。これは、外部

とをつなぐ搬出入口で、大型トラックが入り込める大きさだ。
シャッターは開いていた。外は新館横手の駐車場になっている。その向こうに、局の裏門が見える。
倉庫内をひととおり見終わったあとで、この搬出入口内側わきに、コンクリートで固めた小部屋があるのに気づいた。田代は、そのほうに駆け寄った。畑山も、田代のあとに続いた。
スチール製のドアは、ロックしてなかった。のぞき込んでみると、中は八畳間を二つ合わせたぐらいの広さである。コンクリート床に、テレビカメラが一台、カバーをかぶせて置いてある。ほかにカメラ用の太いコードの束が、とぐろを巻いて投げ出されてある。
〈放送器材の置場だな〉
と判断した。全体に埃っぽいところをみると、日頃あまり使わない予備倉庫で、故障カメラなどの置場に利用しているのかもしれない。
がらんとした床の一部に、楽器ケースが積みあげてあった。ボーカル用と思われる細長いスピーカーボックスが二個。ギターやベース用のアンプが三台。それにボーカルアンプや、衣装ケースらしいもの、ドラムセットの一部など、個数にして十以上のバンドの荷物が目についた。
これといった異状もなく、五分ほど大道具置場にいてから、二人はそこを出た。事故というのも、畑山の考え過ぎだ、と田代は思った。理絵はみずからの意志で姿を消したのだ。さもなければ、出演ギリギリに間に合うよう、スタジオに戻ってくるだろう、と彼は想像した。
〈いずれにしても、第三者のおれが、これ以上、気を揉む必要なんかない〉
田代が理絵捜しに動いた理由は、一つに畑山に向ける同情心からだ。主家の娘の気まぐれに振り回される彼が気の毒だった。田代自身、自分を縛っている芸能界の権力に、内心は怯えている。畑山の立場に、連帯感を揺り起こされた。
理由の二番目は、命令者がその権力だったせいだ。北条が年下であれ、局員の指図には逆らえない習性が身についていた。
だが田代が、快活でお人好しなのも確かであった。誰に言われなくても、事情を知れば気さくに手を貸してい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor